



大口コレクションの郷土玩具から

TOMO no KAI NEWS

Toyohashi City Art Museum

FU 風伯 HAKU

絵画名品100選

BEST 10 決定!

このたびの豊橋市美術博物館所蔵「絵画名品100選」会場において作品人気投票「ベスト10」を実施したところ、878名の方にご応募いただきました。投票の結果、森清治郎「日本の民家」(裏表紙参照)がベスト1に輝きました。そのあとに、平川敏夫「雪后閑庭」、富安昌也「モスタルの道具屋」が続きますが、やはり郷土出身の画家の穏やかで写実的な情景画に人気が集まりました。このベスト10作品については、絵はがきを作製いたしましたので、ぜひご来館の際にお求め下さい。

また、次期の常設展示(平成19年1月30日～4月2日)では人気の高かった日本画家を取り上げます。平川敏夫・高畑郁子・松林桂月などの他の所蔵作品をご紹介しますので、この機会にご覧いただければ幸いです。(※洋画家の特集展示については1月21日で終了)



▲平川敏夫 「雪后閑庭」(右隻)

ベスト10投票結果

順位	作者名	作品名	得票数
1	森清治郎	日本の民家	76
2	平川敏夫	雪后閑庭	69
3	富安昌也	モスタルの道具屋	67
4	広本季与丸	朝の雪道	53
5	島田卓二	桂川附近	41
6	野田弘志	黒い風景 其の参	33
7	高畑郁子	浄界	31
8	上田 薫	卵にスプーンA	30
9	松林桂月	葡萄栗鼠	27
	三岸節子	グァディスの家	27

▶富安昌也
「モスタルの道具屋」

◀投票結果・作品
画像・解説がホーム
ページ <http://www.toyohaku.gr.jp/bihaku/>
をご覧ください。



◇応募者からのコメント

ふるさととは遠きにありて想うものと申しますが、私のふるさととも鳥根県の山奥でかやぶきの古い昔の家です。15歳の時ふるさとをあとにして数えるしか帰省出来ずにいます。年老いた父母の事が気になりました。今年の秋は一度帰省しようと思いました。森清治郎さんの「日本の民家」は私の心になんとも言えない郷愁を与えてくれました。山の紅葉と稲を刈り取ったあとの田んぼの様子。庭に植えてある柿の木。農具小屋……。この絵の中からもみぐらを焼く秋のふるさとのおいさを感じました。とても心安らく作品に出会えました。(59歳・豊橋市在住・主婦)

■森清治郎「日本の民家」

東海道五十三次宿場展XIV

～石部・草津・大津・京～

平成19年2月17日(土)～3月25日(日)

豊橋市二川宿本陣資料館

※月曜休館 ※9:30～17:00(入館は16:30まで)

江戸時代、江戸と京・大坂をむすぶ街道として最も栄えた東海道五十三次の宿場を、江戸日本橋より京三条大橋まで順次紹介して行く展示会の第14回目(最終回)です。

今回は近江国の石部宿、草津宿、大津宿の3宿と「近江八景」、東海道の起点・終点であった京三条大橋を取り上げ、歌川広重・葛飾北斎等の浮世絵、町並みの様子を描いた宿絵図、大名の休泊した本陣の間取図や宿帳、街道の名物など各種資料約120点により、宿場や街道、往来する人々の様子を紹介します。



「二川宿本陣講座—東海道近江路を旅する—」

1. 日 程(平成19年)
 - 3月10日(土) 「立場の文化—榎木立場と目川の立場」
佐々木 進 氏(東海歴史民俗博物館館長)
 - 3月17日(土) 「東海道草津宿と本陣田中家」
八杉 淳 氏(津市文化財保護課学芸員)
 - 3月24日(土) 「東海道大津宿と近江八景」
横谷 賢一郎 氏(大津市歴史博物館学芸員)
2. 場 所 豊橋市二川宿本陣資料館 講義室
3. 定 員 50名
4. 参加料 無料(但し、初回参加時のみ入館料が必要)
5. 申込み・問合せ
2月11日(木)から二川宿本陣資料館へ電話で(先着順)
☎0532-41-8580

名古屋ボストン美術館館長就任のあとさき

名古屋ボストン美術館館長 馬場 駿 吉



昨年秋、名古屋ボストン美術館から思いがけない要請を受け、10月12日、電撃的に館長をお引き受けすることになった。

名古屋ボストン美術館が財政難によって、一時は存続が危ぶまれる状況にあり、前任館長の辞任以来、1年半ほども不在状態が続き、また美術

館の頭脳であるはずの学芸部も一旦解体された、などマイナス・イメージの新聞報道を私たちは何度も眼にして来た。元来、この美術館は独自のコレクションを持たず、米国ボストン美術館の40万点以上もあるとされる豊富な所蔵品を借用、展示することを目的として設立されたものであるがゆえに、一般の美術館に比べ、かなり特殊な運営を運命づけられていると言っているだろう。分館ではないので、もちろん独立した経済基盤の上に諸事万端を動かしてゆかねばならないのだが、バブル経済崩壊後、財団基金の運用利息による資金運営が破綻し、一方、基金の取り崩しによって、巨額の寄付金を拠出するにもかかわらず、展示会の企画や館内全体における展示の細部にわたるまで米国側の指示に従わざるを得ない契約が結ばれていたことなども不平等感が強い一面だった。このように名古屋側の希望が反映されにくい仕組みであるとともに、企画展が年2回に限定されていたこともあって、次第に硬直化が進行することになったのだろう。そんなことが複合的に絡まって入場者数も頭打ちとなり、一旦は存在意義を問い直すところまで行きついたのでと思う。

そのままの姿であれば「火中の栗」なのだが、館長就任の要請を受けて、現状の詳細を聴くと、母体である名古屋国際美術文化交流財団の小笠原理事長をはじめ美術館職員、再建された学芸部所属の5人の学芸員たちがすでに火中から栗を拾い上げて、新館長を待っていて下さるのがわかり、それをお受けすべきだと決心した。昨年行われた契約の見直しは従来

の課題をかなり軽減することになっていたのだ。米国ボストン美術館への寄付金が大幅に減額され、愛知県、名古屋市、名古屋財界の理解ある支持が得られて2018年度までの経済的運営基盤が整ったこと、企画展検討委員会を設置して市民の要望を米国側に伝える仕組みが出来たこと、2009年からは上階（5階）では名古屋独自の企画展を開催することが出来ること、国内巡回やマスコミ文化事業部との共催が可能となること、など様々な規制が緩和されるようになる。これらを追い風にすれば、地元に着目した親しみやすい新生ボストン美術館への道もそんなに遠くはないはずだ。ご期待いただきたい。

年末に朝日新聞の企画で愛知、岐阜、三重の各県立美術館館長と共に東海地方の美術界回顧を語り合った折に、これからは美術館相互間の協力も一層密にして、それぞれ独自の特徴を出し合いたいと話し合った。愛知県内の美術館相互の協調、たとえば友の会の交流なども時々企画してもいいのではないか、と思ったりする。私はこれまで名古屋市美術館参与を経験し、現在は名古屋ボストン美術館長と豊田市美術館運営協議会会長を兼任させていただいている。豊橋市美術博物館の歴史は20年を超え、これらの美術館の先輩格に当たる。友の会々報「風伯」も目を見はる充実ぶりで63号の積みかさねは重い。これからも情報の交換などご交誼をいただきたい。

ここに執筆の機会を与えていただいたのは、昭和43年6月～45年3月まで豊橋市民病院耳鼻咽喉科部長として勤務し、豊橋市内に2年ほど在住したというご縁があったことによるのだろう。当時の病院長は森泰樹先生。画家との交友もあり、病院内には中村正義や森緑翠の作品がかかっていたのを記憶する。芸術も医学も人間を扱う点では共通するところがあり、多忙な中でも絵画との一瞬の接点に心休まるものを感じた若き日の思い出が懐かしい。医学から距離を置いた今も。

プロフィール

美術・演劇評論家、俳人、医学博士。中学時代に俳句入門。1960年代初頭、詩人・瀧口修造とその周辺の多くの芸術家たちに知遇を得て、美術、演劇、映像、舞踊、音楽、文学など、現代芸術の最前線を横断する評論、エッセイを新聞、雑誌などに多数執筆。昭和7年名古屋市生まれ。32年名古屋市立大学医学部卒業。43年～45年豊橋市民病院耳鼻咽喉科部長。平成3～7年名古屋市立大学病院長。10年～同大学名誉教授。10～13年名古屋市美術館参与。14年～豊田市美術館運営協議会会長。18年名古屋演劇ペンクラブ理事長。名古屋市芸術賞特賞受賞。名古屋ボストン美術館館長。著書に句集「耳海岸」、句画集「幻視の博物誌」など。ほか医学専門書多数。

友の会20周年記念
ドレスデン・パリ美術音楽の旅
2006年10月10日～17日



ドレスデン国立美術博物館 館長よりメッセージ

原文成 様

豊橋市美術博物館友の会 会員の皆様

清秋の候、皆様にはいよいよご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、10月11日、及び12日には、ドレスデンをご訪問いただき、厚くお礼申し上げます。

皆様方には、ハイアと私共が計画しました様々なプログラムや、それぞれの国立美術館にお越しいただき、ドレスデンにおける芸術、文化への幅広い認識に加え、新たに深い関心を持たれたことと存じます。

日本とドイツの間の文化交流は、両国が遠く離れているにもかかわらずさかんで、しかも多方面に渡っています。多くの友好協会、友好都市やその他の文化的な繋がりが、日本とドイツにおけるかけがえのない関係の育成に貢献しています。芸術分野での交流が、相互にとっても強い関心事であることには感謝しています。大規模な文化イベントとして催されたのが、2005年から2006年にかけての「日本におけるドイツ年」でした。300の事業が企画されておりましたが、最終

的には1600以上が開催されました。予想をはるかに上回る成果があり、両国間のつながりに著しい関心が寄せられていることを示しています。国際化時代には、相互理解を深めることが特に大切です。あらゆる文化を交差させることは、同時に独自性や多様性をさらに引き立たせます。日本とドイツは、親気を持ってそれを成し遂げています。

存続していく両国間の文化には、将来へも引き続き、率直に強い関心をもって親交を深めていきたいと願っています。また、豊橋市の美術博物館の皆様や、会員の皆様の訪問を、私どもいつでも心より歓迎いたします。ドレスデンの国立美術館を代表して、まことに結構な贈り物に、改めて厚くお礼申し上げます。

略儀ながら書面にてご挨拶申し上げます。

2006年10月27日

マルティン ロート

Martin Roth

ドレスデン訪問記

10月10日、夕間に建物のシルエットがくっきりと美しい、街自体がすでに美術品であるドレスデンに到着。

11日 ドレスデン国立美術博物館は12のミュージアムで構成されているが、その1つ、王冠の門があるツヴィンガー宮殿内のアルテ・マイスター絵画館へ。日本語が達者な学芸員の解説を聞きながら、ラファエロの「システーナのマドンナ」、ルーベンスの「白鳥と一緒にいるレダ」、フェルメールの「窓辺で手紙を読む少女」



ラファエロ作「システーナのマドンナ」

などなど、を観る。次いで、中国、日本の陶磁器、マイセン磁器など約2万点の収蔵品を誇る陶磁器コレクションを見学。

午後はドレスデ

ン王宮内の“緑の丸天井”宝物館など見学。アルテ・マイスターの膨大な数の収集はアウグスト強王とその息子アウグストⅡ世の時代になされたものであり、芸術擁護者である彼ら君主たちのコレクションがドレスデン国立美術博物館の核になっているのである。そして、ドレスデンの殆どの美術品は、空襲の被害を受けていない。戦況が厳しくなる前に、安全な場所に移され、保管されていたのである。



展示室で説明を聞く子供達

夜、ゼンパーオペラ劇場でドレスデン国立交響楽団によるリヒャルト・ストラウス作曲「エレクトラ」を鑑賞。この日のホテルは戦火で消失したタッシュェンベ

ルク宮殿を復元した超高級“ホテル・ケビンスキー”であった。

12日 早朝、ホテルの中で、シェパード犬2匹とボリス4人が突然現れ、驚いた。プーチン大統領が宿泊していたらしい。日本に留学経験のあるガイドさんと市内観光。荘厳なパイプオルガンの宮廷教会、マイセンタイルでザクセンの各時代の君主と要人が描かれている、ドレスデン城の外壁、などなど。

14年前に訪れた時は、あちこちの無残な戦禍の跡に、暗い印象を持った記憶がある。特に聖母教会は瓦礫の山で、元の姿など想像することもできなかった。今回、その聖母教会が建っていた。人が、こんなに大きくて、立派な、ドレスデンの象徴でもある教会をも破壊しつくしたことが、戦争の証として、破壊された姿を残すのではなく、有りと有らゆる力を合わせ、オリジナルの石の瓦礫を拾い集めて完全に復元したことが、に強い衝撃を受けた。

親から子へと、財産の継承がごく普通に行われている文化圏なればこそ、世紀を超えた古い歴史のある建物がそのまま市庁舎、美術館、大学、ホテル、などとして蘇り石畳の道も一体となって、車も超低床路面電車も行き交う、華麗な文化都市を作り上げているのであろう。



聖母教会の上より

る文化圏なればこそ、世紀を超えた古い歴史のある建物がそのまま市庁舎、美術館、大学、ホテル、などとして蘇り石畳の道も一体と

伊藤玲子(224)

芸術の都・秋のパリ訪問記

秋のパリは初めてです。黄色に染まったマロニエの街路樹、そんなシャンゼリゼ通りの風景を心に描きながらの訪問でした。私の今回のパリ訪問には四つの目的がありました。一つ目はパリ郊外のバルビゾン村を訪問して、後に生まれる印象派の土台ともいえるミレー、ルソー達のバルビゾン派の古里の風景に接してみたい、二つ目はルーブル美術館の「モナリザ」に会うこと、三つ目はパリに林立する「プチミュゼ」の一つでも多く訪れて、芸術の多様性、奥深さなどを少しでも感じてみたい、そして最後にオペラ座での本場のオペラを鑑賞することでした。

パリ第一日目はスッパリと暗れた朝が私達を迎えてくれていました。さあバルビゾン村へのエクスカーションです。まず隣村のポンピエール村でミレー、ルソーが仲良く並んで眠っているお墓にお参りした後、

バルビゾン村に入りました。寒村というよりは、瀟洒な建物が並ぶ別荘地の印象でしたが、周辺には農業国



バルビゾン村 ミレーのアトリエ

フランスの面影がまだ色濃く残っていて、この村に働く人々と共に生き、自然を写實的に描き続けたミレー達の生き様の一端を感じることが出来た様に思いました。

パリに戻り6年間をかけてリニューアルオープンされたばかりのオランジュリー美術館で、モネの「睡蓮」の連作に圧倒的な感動を受けました。続いて、ルーブル美術館を駆け足で走り抜け、30年前に果たせなかった、「モナリザ」との対面、「ミロのヴィーナス」、「ニケ」などに挨拶をして来ました。そしてその夜は新オペラ座バステューエでの「サロメ」の鑑賞、満ち足りた楽しい一日が終わりました。



オランジュリー美術館 モネ「睡蓮」

第二日目、今日も暖かい太陽が輝いています。まずピカソ美術館でピカソの天才ぶりを改めて実感した後、マルモッタン美術館で「印象・日の出」を鑑賞、更にシラク大統領肝入りでオープンしたばかりの国立ケブランリー美術館で、民族芸術の原点を見せて頂きました。ラストディナーは超高層ビル、モンバルナスタワー最上階の「シェルド・パリ」で、光輝くパリの夜景と共に楽しむことが出来ました。

随分と急ぎ足でのパリ2日間でしたが、事前の金原館長のレクチャーのお陰で鑑賞すべきポイントが絞れたこともあり、有意義な二日間でした。お陰さまで又一つ心の財産を増やすことが出来ました。Merci beaucoup(メルシ・ボクー)!!

坂口幹子(1189)



アルテ・マイスター絵画館前 秘書ハイアさんと学芸員ザンヘルグさんをお見送り

思いがけない、そして素敵な出会い 宮澤 洋子 (766)



久しぶりの奈良は新薬師寺から春日大社の前を通り抜け、三月堂へ向った。ひんやりとした土間で、優しい表情の日光、月光菩薩を見ながら不空鞞索観音の裏側にある秘仏、荒々しいが華やかな彩色が残る国宝執金剛神像に思いを馳せた。二月堂の回廊からの景色を楽しみ、裏参道の石畳を歩きながら、古都奈良の雰囲気を楽しもうと考えていると、夫が「久しぶりに鐘楼を見よう」と言うので大人しく従った。鐘楼の周りを散策していると、傍のお堂の障子が開いて中から人が出てくる場所だった。私たちが興味深そうに覗くと、一瞬躊躇されていた

が、どうぞお入りなさいと上げてくださった。きれいに塗り直された厨子の前に正座した私たちに東大寺を再建した俊乗房重源上人のお堂で、7月の命日にだけ開扉されると説明があった。ちょっとガッカリした次の瞬間厨子が開いた。私は息を飲んだ。数年前の東大寺展で出会った老人が其処にいらした。厳しさと優しさを併せ持つ国宝重源上人坐像は運慶又はその派の力ある仏師の作と言われている。ほんの数分間ではあったが、最高の状態で重源上人に会えたことに感激した。そしてこの幸運に感謝した。この秋、重源上人800年御遠忌を記念して、像の特別公開が行われた。まさにその準備の時の僥倖であった。翌朝、観光タクシーの運転手さんに昨日の感激を話したところ「俊乗堂から出てきた方は私が案内をしたお客さんですよ」にびっくり。

次の旅も素敵な出会いがありますように！

迷いのない線を求めて

上田 央 (506)



絵かきの端くれです。西洋画と東洋画を併行して制作しております。最近では、西洋画にはない余白と線を油彩で表現しています。生きた線をひくことは至難の業で、それを習得するには、〈書〉がいいように思う。鉛筆でもよいが、やはり墨と書道用の筆だ。柔らかく含みがよく描く人のエネルギーを素直に伝えてくれます。線で全てを表現するため筆の力が不可欠です。〈書〉は習わぬほうがいい。生まれもった字を書けばいいのです。その中に本当に美しく輝くものがあります。お習字は、ヤレ墨は平たくすりなさい、文字はカミからはみ出さないよ

うとか…口やかましいので不得意です。専門の諸先生のトコノマ書道ではなく、ダイドコロ書道と申しましようか。ある人はゲテモノ書道とよんでいます。あれが好きです。参考になる人は画家の熊谷守一、肩の力を抜き足腰が大地にピタッとついている。禅僧の書だ。中川一政の書も絵も織部焼のゆがみの美だ。梅原龍三郎の絵そして書、色や形から開放され自由自在に筆が動いています。須田廻太（画家）ですが書もスゴイ。動けばピシと鋭く槍か剣が飛んでくる禅宗の呼吸が最もあらわれている。〈書〉の専門家である井上有一がいた。自分のなんたるかを追い求めていた。おそらく他の者が見たらその下手な字に驚くだろう。バランスは実に卓越している。新井狼子、勅使河原蒼風も大好きです。国立新美術館での発表を楽しみにしています。

応挙と芦雪展

大木 典子 (3050)



八月の末、嵩山町の正宗寺の書画展を見る機会を得た。虫干しを兼ねて二日間だけの宝物展で、古刹の広い本堂や書院、庫裡一杯に天井から大きな絵が掲げられていた。

国重要文化財に指定されている長沢芦雪の〈浪〉〈桃に群雀〉〈楠に鶴〉〈蘭亭の図〉等々。それに狩野元信の〈花鳥山水の図〉や、円山応挙の〈竜虎〉もあった。その中

で特に私が心引かれたのが、芦雪の〈浪〉と〈蘭亭の図〉だった。〈浪〉は岩に砕け散る波と渦巻く波を、大胆な構図で1、2幅に描いたもので、見る者を圧倒する力強さがあった。〈蘭亭の図〉8幅は、王

羲之等の文人が、曲水の宴に遊ぶ姿を描いたもので、手伝いの子供達の姿がユーモラスに描かれており、楽しい絵であった。円山応挙の〈竜虎〉は、松の木根元で、虎が鋭い眼で竜を見上げている印象深い絵だった。

この度、友の会で、奈良県立美術館の応挙と芦雪の特別展を鑑賞出来た。師弟の間柄で、然も同じ様な画題を並べて展示比較するという誠に興味深いものである。応挙の絵の堂々とした品のよい美しさに比べて、芦雪の絵は鋭い感覚とユーモアがあり、生き生きとした面白い絵が多かった。正宗寺に芦雪の絵が保存されている様に、南紀の寺にも沢山の芦雪の絵が残っているという。いつか是非鑑賞したいと願っている。

森のなかの音楽会

2006年11月10日(金) 18:00

友の会20周年記念行事として晩秋の宵、美術博物館の裏庭にて京都のジュスカ・グランベール(注:おじいさんになるまで)というギターとバイオリンのデュオによる森の音楽会を開催いたしました。

友の会会員約80人が集い、キャンドルライトで照らされた森をバックに彼らの楽しいおしゃべりと音楽、時々虫の声も聞こえ、自然の中の音楽会はいつもとまた違った魅力で観客たちを楽しませてくれました。道ゆく人も立ち止まり、一緒に拍手する風景は、いろいろな可能性を感じさせます。



美術と音楽・美術と演劇・アーティスト達の活動が当館を軸にいろいろな形で展開できれば友の会の会員全体で楽しみながら美術館を応援できるのではないのでしょうか。

「わたしたちの街の美術館」として、愛着の持てる美術館をみんなで考えてゆける場になることを期待します。

“美術館で楽しもう・遊ぼう”、これからもいろいろな企画にぜひご参加ください。

富田真知子(272)

松伯美術館と奈良県立美術館を訪ねて

2006年11月22日(水)

秋の日帰り研修は、紅葉の美しいまほろばの大和路へ。日本画家上村淳之画伯が館長をつとめる松伯美術館へ向かう。六角形のガラスが嵌め込まれたエントランスを抜けて展示室へ。特別展「余白の美」～象徴空間の魅力～が催されていた。横山大観、上村松園、土田麦僊、上村松篁といった錚々たる画家の名品の前で、日本画特有の余白について説明していただいた。描かずして己の思いを象徴的に表現することがいかに大切で難しいことかを実感するなど、興味深いお話しであった。春日ホテルでの昼食後、奈良県立美術館で開かれている特別



展「応挙と蘆雪」の展示会場へ。さっそく講義室で副館長・吉田俊英氏の説明を聴き、さらに展示されている絵の前で詳しく解説していただいた。今回の展示の見所は応挙と蘆雪の対比の面白さでもあったが、一層興味深く鑑賞することができた。その後、美しい秋の奈良公園を散策、東の間のやすらぎのひと時を楽しんだ。

また、バスの車中では、創画会会員の高畑郁子氏、美術博物館の後藤副館長にレクチャーしていただいたり、友の会会員からのビデオを見ての研修と親睦であった。

須見テル子(282)

19年度会員更新について

3月より更新手続きを開始する予定です。後日更新のお願いと郵便局の払込票を郵送させていただきますので、よろしくお願いたします。

収蔵品紹介

[日本の民家]

森 清治郎 ●MORI, Seijiro (1921-2004)

昭和51年(1979)麻布・油彩
162.0cm × 227.0cm

東京下町の建造物に続いて、ヨーロッパの街並みを描いた森清治郎が、最後に辿り着いたモチーフは滅びゆく日本の民家であった。古き良きものを絵筆に記録して後世に伝えようと、奈良・大和路をはじめ、信州や東北など全国各地を飛びまわり、個展でその成果を発表して“民家の画家”とさえ呼ばれるようになった。

その集大成ともいえる本作には、福島県南会津地方の隠れ里のスケッチをベースに、画家のフィルターを通して純化された理想的な古里が現出している。厚塗りの画面には画家の熱い想いが込められ、揺るぎない存在感を主張すると同時に、紅葉に彩られた山里には、日本人に共通する象徴的な“原風景”が内在し、人々の心に郷愁を伴った安らぎと感動を呼び起こす。

1992年の夏、豊橋市美術博物館では、73点の代表作を集めて画業を回顧する「森清治郎展」を開催した。会期中の講演会で、「幼い頃、田植えを手伝って思ったことは、秋に実りが無いと親父が困るだろうから、苗を1本ずつ時間を掛けて丁寧に植えた。今もそんな心構えで自分の作品を作っている。」と、やさしい声で画家は語った。その時に見せた笑顔が、いまだに私の脳裏に焼きついて離れない。

寡作家であるが故に、画商と交わず、画壇とも決別して孤高の道を歩んだ森清治郎。その生きざまは、不器用であったが、実に潔い。

(豊橋市美術博物館主任学芸員 大野俊治)

●おでかけになりませんか？

館名	展覧会名	会期
名古屋ポストン美術館	ヨーロッパ肖像画とまなざし 16-20世紀の顔	2/4(日)まで
愛知県美術館	ルソーの見た夢、ルソーに見る夢 —ルソー、素朴派と日本—	2/12(月・祝)まで
メナード美術館	麗しの日本 —日本画と漆工芸の美—	2/25(日)まで
名古屋市美術館	大エルミタージュ美術館展 いま甦る巨匠たち400年の記憶	3/4(日)まで
豊田市美術館	「金山明」展	3/25(日)まで

編集後記

■ 名古屋ポストン美術館館長に就任された馬場駿吉先生に特別寄稿をお寄せいただきました。名古屋市立大学名誉教授(耳鼻科)として、高名な俳人として、また現代芸術の評論家としてたいへんご多忙な日々を送られている中での館長ご就任。そんな時間を割いてのご寄稿、感謝申し上げます。

豊橋市は、昨年の愛知万博から市制100周年へとお祭り続きの2年間でした。

この間創立20周年を迎えた豊橋市美術博物館友の会も、豊橋市美術博物館に呼応して、市民オペラ「魔笛」のワークショップや美博裏庭での「森の中のコンサート」など、新しい試みに挑戦し、誌面やチラシで皆様にお知らせしてまいりました。

お祭りに沸いた年も終わりましたが、これからもますます楽しい企画に挑戦し、未来をめざして、地道に豊かな感性を育てる美術博物館のお手伝いを続けていきたいと思っております。皆様のご参加をお待ちしております。

(風伯編集部)